

J. J. Prinz, *The Emotional
Construction of Morals*,
5.2 Objections to Relativism

吉田 敬 (UTCP)

5.2.1 Descriptive Relativism (pp. 187-91)

- 多様な道徳的価値の例（カニバリズム、一夫多妻、一妻多夫、近親相姦、間引き等々）
- こうした例からすると、記述的相対主義には疑問の余地がないように思われるが、三つの反論がある。
 1. 文化的差異が誇張され過ぎではないのか。
 2. たとえ道徳的価値に違いがあるにしても、非道徳的事実が示されれば、道徳的論争は解消するのではないか（価値に関する意見の違いは、非道徳的事実に関する意見の違いだということになる）。
 3. 二つの文化的集団が同じ出来事について異なる道徳的判断をしているとしても、二つの集団が当の出来事に同じような状況的意味を与えているのかどうか定かではない。一方が他方の観点から世界を見られないのなら、道徳的価値が本当に異なるのかどうか、そもそもよく分からない（cf. Michele Moody-Adams's *Fieldwork in Familiar Places*）。

5.2.1 Descriptive Relativism (pp. 191-5)

- プリンツの記述的相対主義擁護

1. 必ずしも文化的差異が誇張されているとは言えない。
 2. ケースバイケース。確かに事実誤認に基づいている場合もある。しかし、我々の事実に信念は、後付けとして持ち出されることがある。また、論争が価値の違いに基づいている場合もある。更に、道徳的論争において、価値と事実を区別するのは容易ではない（例 中絶された胎児は人かどうか）。
 3. 極めて密接に関係している文化的集団間の道徳的論争を見れば、単に事実に信念の違いだけでなく、道徳的価値の違いがあるのは明らかだ（例 アメリカのリベラルと保守派、同じ共同体内の男女、アメリカ北部と南部の白人男性）。
- こうしたことを考慮すれば、ヒュームのように、記述的相対主義を論駁するために、人間本性に訴える訳にはいかない。根源的な道徳的価値は人間本性に由来するとヒュームは論じるが、根源的な道徳的価値（基礎的規範）は、条件付けによって得られる。つまり、異なる文化のメンバーは異なる根源的価値を持つ（※第7章、および「生まれか育ちか」論争との関係に注意する必要がある）。

5.2.2 Coherence (pp. 195-6)

- メタ倫理的相対主義：道徳的判断の真理条件は、その判断が為される文脈に依存する。
- このテーゼが正しいとすると、一つの判断が真でも偽でもありうる。従って、斉合性が取れなくなる。
- しかし、プリンツの支持する相対主義では、道徳的判断は文脈に応じて、判断されなければならない。それによって、斉合性の問題を回避できる。
- 相対主義の批判者：こうした戦略は相対主義を救うどころかむしろその基盤を掘り崩している。というのも、内容相対主義が正しいなら、文脈を変えるということは道徳的用語の意味を変えることであり、そうした変更が起こる場合に、「道徳的な」語彙がそれでも「道徳的」と呼んでよいのか保証の限りではない。とすると、我々の判断だけが道徳的ということになるのではなかろうか。

5.2.2 Coherence (pp. 196-7)

- デイヴィッドソンの論文、「概念図式という考えそのものについて」 (1974)
- デイヴィッドソンの議論：プリンツ簡略版の更なる要約
 - 図式1と2があり、我々が図式1の語彙で話し、誰かが図式2の語意で話しているとする。図式2の文が意味があるとみなしうるのは、その文が我々の理解する言語に翻訳される時のみに限る。仮設により、図式2が図式1に翻訳できないと、図式2の文に意味があると我々が考える根拠はない。つまり、図式2の文は我々の言語に翻訳できるか、あるいは単なるノイズであるということになる。
- 道徳相対主義に対する、デイヴィッドソン流の批判（クーパー）
 - 「約束を破るのは道徳的に良いことだ」という人に出会ったとしよう。その人が非常に異なる道徳的図式を持っていると我々は初め、考えるかもしれないが、この考えは擁護しがたい。というのも、我々が悪いと思う事柄について、その人が「良い」ということ自体によって、その人が言っていることを理解したのだという我々の自信を掘り崩してしまうからである。

5.2.2 Coherence (pp. 197-9)

- プリンツの反論 道徳相対主義に対する、デイヴィッドソン流の反論は二つの疑わしい想定に基づいている。
 1. ある人の発話に意味があるのは、我々がそれを自らの語彙に翻訳できる時に限るという想定
 - しかし、デイヴィッドソンの議論は、意味論的検証主義の強い形に等しく、人間でない動物には意味のある心的状態がないということを含意する。また、我々には理解しがたい形で道徳的用語を使っている人たちは、ナンセンスを語っているということにもなる。
 2. 誰かが「良い」や「悪い」という用語を驚くべき形で使っているなら、こうした用語が道徳的信念を表すために使われていると我々が考える理由がないという想定
 - 大抵の文化には、道徳的情緒の重なり合いがあり、こうした重なり合いは生理学、現象的報告、表情、行動などによって、確認できる。我々が評価する事柄に対して、否定的な情緒が表された場合には、そのような人たちは我々とは異なる道徳的価値を持っていると結論づけられる。

5.2.3 Indexicality (pp. 199-200)

- プリンツの内容相対主義
 1. 発話、あるいは判断は、部分的に、文脈によって決定される。
 2. 道徳的用語は文脈抜きではいかなる性質も表せない。
- 代名詞が文脈に依存していて、指標的であるのは明らかだが、道徳的用語は本当に指標的なのか。単語の指標性をはかるテストを行うと、道徳的用語はテストに失敗するように思われる。
- この問題を考えるために、キャペリンとルポアの*Insensitive Semantics* (2005)の議論を利用する。
 - “It’s raining.”という文では、雨が降っている場所は明示的に言及されていないが、文の意味の一部である（つまり、隠れた指標が含まれている）。
 - キャペリンとルポアは、隠れた指標説に反論し、雨が降っている場所は文の構文、あるいは意味の一部ではないと主張し、それによって、文脈依存性の議論に反論しようとしている。

5.2.3 Indexicality (pp. 199-200)

- プリンツは“*It's raining.*”に関しては、キャペリンとルポアが正しいのだろうと考える。しかし、彼らの議論は相対主義にとって問題となる。
- 内容相対主義は、文脈に敏感な用語が「隠れた指標」を含んでいると想定していることがある。こうした隠れた指標が存在するなら、それは当の指標を含む文の構文に寄与していると考えられ、構文論的テストをすれば、隠れた指標の存在が確認できるはずである。文脈に敏感な用語を含んでいるとされる文が、構文論的テストに失敗したとすると、それは当の用語が文脈に敏感であるという主張を退ける根拠となりうる。キャペリンとルポアはこうしたテストをいくつか提示しており、一見したところでは、道徳的用語はテストに失敗しているように思われる。
- こうした構文論的批判に答える方法は二つある。一つは、構文論的テストがそもそも相対主義にとって、良いテストではないと論じる方法。もう一つは、道徳的用語が構文論的テストに合格しているのだと論じる方法。プリンツは後者を取る。

5.2.3 Indexicality (pp. 200-1)

- 隠れた指標説によれば、“Cannibalism is wrong”は“Cannibalism is wrong *according to the values of the appraiser or some other salient individual(s).*”であり、“You ought not to engage in cannibalism”は“You ought not to engage in cannibalism *according to the values of the appraiser and the addressee.*”となる。
- キャペリンとルポアの三種類のテスト
 1. 逆行照応的言及（anaphoric reference）：明示的指標を含む文はその指標に逆行的に言及する単語を含む節を付け加えられる。
- (1a) He is a senator. (1b) He is a senator **who likes himself**. “himself” は“he”に逆行的に言及する。
- (2a) That’s a table. (2b) That’s a table **but it is not a book**. “it”は“that”に逆行的に言及する。

5.2.3 Indexicality (pp. 201-2)

- (3a) Cannibalism is wrong.
- (3b) *Cannibalism is wrong, but they do eat intelligent mammals.
- (3b)は奇妙で、テストに合格していないように思われる。しかし、道徳的文はその文を発話している評価者の文脈に通常、言及している。従って、次のような形にすれば、奇妙さは解消する。
- (3c) Cannibalism is wrong, but we do eat intelligent mammals.
- しかし、(3c)がテストに合格しているとは言えない。というのも、weは逆行照応的に用いられないから。とすると、逆行照応的言及テストを道徳的用語に当てはめることは難しいということになる。しかし、(3b)を人類学者のフィールドノートを読んでいるように、非言語的な文脈を考慮に入れた形、つまり逆行照応的に読めるのではないだろうか。

5.2.3 Indexicality (p. 202)

2. 明示的指標はア・プリアリに知られうる文を作ることができる。

- (4) I am the person who utters this sentence.
- しかし、道徳的文にとってそれは難しい。次の文は典型的にア・ポステリオリのように思われる。
- (5) If Killing is wrong, then it is against my value system to kill.
- 殺人が悪いことであるのは、私に依存する訳ではない。たとえ私が大量殺人者で殺人が許されると考えたとしても、前件が真であり、後件が偽であるから、(5)は偽となる。
- これは隠れた指標説に対する強力な反例のように見えるが、この例には問題がある。プリンツの考えでは、「悪い」という単語は話し手か、または他の目立った個人に相対化できる。そうすれば、ア・プリアリに知られうるような形で、(5)を読める。

5.2.3 Indexicality (p. 203)

3. 明示的指標は隠れた指標には作れない矛盾を作れる。

- (6) I am hungry, but the speaker of the sentence is not hungry. はっきりとした矛盾
- (7) It's raining, but it is not raining in Chapel Hill. 隠れた場所のパラメータがChapel Hillで満たされれば、矛盾。その場合、(7)は(8)に等しい。
- (8) It's raining in Chapel Hill, but it is not raining in Chapel Hill.
- (7)は決して矛盾していないが、(8)は常に矛盾なので、(7)と(8)は同値ではない。
- (9) Killing is wrong, but it is not against my value system to kill.
- (9)が矛盾しているように読めるということは、(9)は(6)における明示的指標の例と同じであって、(7)とは異なる。これは道徳的文の隠れた指標説が予想することである。

5.2.3 Indexicality (pp. 203-4)

- キャペリンとルポアによる、更なる議論：道徳的文は内容と文脈を切り替えられるのか
- (10) When John said, “I am hungry,” he spoke truly, but I was not hungry.
- (11) *When Moctezuma said, “You ought to eat prisoners,” he spoke truly, but you ought not to eat prisoners.
- (10)は問題ないが、(11)は問題がある。これは道徳的用語が意味を文脈から得ていないことを示唆する。道徳的用語と指標的代名詞には重要な違いがある。道徳的用語は感情を表している。我々が他人の主張を真だというとき、我々は是認を伝えている。我々は、他人の道徳的見解に対する感情的なコミットメントを感じずには、その見解を是認できない。(11)の問題は、語用論的なものである。

5.2.3 Indexicality (pp. 204-5)

- 先に述べたことは道徳的言説に限定されている訳ではない。
- (12) *When John said, “The tripe is yummy,” he spoke truly, but tripe is not yummy.
- (12)はプリンツにとっては、奇妙に聞こえる。(11)と(12)は意味論的に矛盾しているのではなく、語用論的に奇妙なのである。
- (13) When Moctezuma said, “You ought to eat prisoners,” what he said was true in his value system, but I think you ought not to eat prisoners.
- (13)は矛盾には聞こえない。相対主義が偽だとすれば、(13)は偽かもしれないが、それを示すには、相対主義を論駁することが必要となる。(13)にはっきりとした矛盾がある訳ではない。(13)が奇妙だと想定することは、相対主義者に対して、論点を先取している。

5.2.4 Insidiousness (pp. 205-7)

- 相対主義は油断ならない (insidious) 学説だとしばしば見なされている。
- もし道徳が複数あるとすると、ある道徳が他の道徳より優れていると証明する方法がないように思われる。これには悩ましい帰結が二つある。
 1. 我々が他人と道徳的論争を行っている場合、その論争が見せかけだということ (例 リベラルな価値と保守的な価値)
 2. 我々の道徳的選好が特別扱いされないということが一旦分かると、道徳的選好に対する我々の自信が不安定なものになる。
- 望ましくない帰結があることを示すことによって、記述的理論を論駁することはできない。しかし、相対主義は有害なテーゼなのかもしれない。相対主義を論駁できないとしても、根絶すべきではなかろうか。これが相対主義者にとって最も火急の挑戦である。

5.2.4 Insidiousness (pp. 207-8)

- 前述の批判に対する、五つの回答
 1. 我々の価値が特別扱いされていないことの発見には肯定的な帰結がある。
すなわち、相対主義は寛容を促進する。絶対主義者も寛容であり得るが、絶対主義者と相対主義者は寛容に対して異なる関係を持つ。
- 絶対主義者の寛容：「私の道徳は間違っているかもしれない。」
- 相対主義者の寛容：「私の見解が正しい。あなたの見解も正しい。」
- 絶対主義者は自分の見解に確信を失わない限り、寛容にはなれないが、相対主義は自分の見解に確信を持って、寛容になれる。その点で、相対主義は絶対主義より満足のいく形で寛容を提示できる。

5.2.4 Insidiousness (pp. 208-11)

- 異文化の習慣と西洋的価値の問題（例 女性への割礼が定言的に間違っているのか）
- 反割礼キャンペーンは西洋的価値を異文化に押し付けているのだろう。西洋的なリベラルの価値が特別扱いされないとする、キャンペーン自体が間違いに基づいているのかもしれない。しかし、相対主義だからといって、何でも容認する訳ではない。**望まない**被害者が害を受けている場合には、相対主義者は抗議できる。女性に対する割礼の問題は、その割礼を受けている女性が**本当に望んでいるのかどうか**という問題に最終的にはかかっている。
- （※被害者が本当に望んでいるのかどうかをどのように判断するのか。被害者はどのような社会で暮らしているのか。プリンツの議論は、様々な問題を含んでいるように思われる。）

5.2.4 Insidiousness (p. 211)

2. 相対主義の批判者は、確信を失うことがどれだけ悪いことかを過剰に見積もっており、更に、もし相対主義が真だとすれば、確信が放棄されなければならない程度を過剰に見積もっている。
- 第一点：女性に対する割礼が定言的に間違っているという確信を失うとしても、それはひどい帰結ではないかもしれない。
 - 第二点：味覚絶対者が、チョコレートが客観的に、普遍的に、絶対的に素晴らしいものだという確信を放棄しなくなっただとしても、チョコレートがその人にとって素晴らしいものだという確信を放棄する必要はない。
 - 大事なことは、我々が自分の価値を受け入れるのは、それが自分の価値だからである。我々は自分の評価するものを評価する。道徳的価値が絶対的な想定に基づく必要はない。

5.2.4 Insidiousness (pp. 211-3)

3. 相対主義が真だとしても、道徳的論争が見せかけだということにはならない。
 - 異なる価値体系を持つ人たちは、重なり合う価値を持っている。我々が異なる道徳を持つ人たちと論争する時、道徳的に共通の基盤を見いだすことができる。共通の基盤を見いだすことで、我々は互いの価値や実践的行動を変えようとしている。
4. 相対主義は政治的に中立ではない。
 - ある政策、政体、イデオロギーは絶対的道徳がないという仮設と調和できるが、調和できないものもある。相対主義は寛容を含意しない。寛容を心理的に促進するだけである。相対主義が寛容を促進するという主張は、好みが真理要求をしないのであれば、他者にその好みを押し付けるのが悪いことだという道徳的価値を既に持っている人たちに限定される。

5.2.4 Insidiousness (pp. 213-5)

5. 二つの道德のどちらが道德的に優れているかを決められるような、超越論的な立場は存在しないが、非道德的根拠に基づいて、裁定を下せるような超越論的立場はあるかもしれない（この点については第8章で触れる）。
- 以上の議論の結論としては、相対主義は人類学から豊富なサポートを受けている首尾一貫した学説であり、道德的用語の構文論にも多大な影響を及ぼしている。

The End